
幼なじみ

吉田アカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみ

【Nコード】

N 8 4 5 2 H

【作者名】

吉田アカリ

【あらすじ】

女子から人気の高い幼なじみの吾郎をずっと片思いしている清水薫。ある時1人の女の子が吾郎に近づいてきて…！

プロローグ

ここは聖秀学園高校。

もともとは女子高であつたため、生徒は女子がほとんどである。

そのため、2年から転校してきた野球バカ・茂野吾郎はルックスがよかつたために女子から人気が高い…。

本人は恋などには鈍感なので気づいていないが、吾郎が女子から人気であることに焦っている人物がいた。

——そう。幼なじみの清水薫である。

第1話・噂話し（前書き）

ここから本文に入ります（〃。ω）ノ

第1話：噂話し

ある日の昼休み……

「ねえ薫！知ってた？A組の茂野くん、めっちゃ女子にモテモテみたいよ！！」

急に真紀子がそんな話題を持ち出した。

「えーそれホント？あの本田がモテるわけないじゃん！！」
と言いつつ内心はまじで！？と焦る清水。

すると一緒にお弁当を食べていた内の1人の子が
「わかる！！だって茂野くんカッコイイもん！
あたし告ろうかと思ったくらいだもん……」
と言い出した。

「は！？何言ってるの？あんな野球バカの本田は止めた方がいいよ
！」

「てかさー前から思ってたんだけど、薫ってなんで茂野くんのこと
本田って呼ぶの？」

「…えっ？なんていうか…くせで…かな？
あいつも別に気にしてないしさ。」

清水は今まで気にも止めていなかったことを聞かれ、一瞬驚いた。

「ちょっと薫！それ、危ないよ！！」

「なんで？」

真紀子の言っていることの意味がわからず、清水？マークを浮かべる。

「薫のために言っておくけど、最近茂野くんにベタベタしてる女がいんのよ。」

名前は上條桃子。

ほら、3学年イチかわいって評判の…

でね、その女は茂野くんに近づく女の子をみんなあらゆる手を使って遠ざけようとするんだってさ。

もしかしたら次に目つけられるのは薫かもよ！！！！」真紀子はすごい形相で言い寄ってきた。

いきなり出てきた名前に清水はビックリした。

——上條桃子—— 3年では知らない人がいないくらい可愛いくて有名だ。

噂ではカッコイい男に目がなく、どんな手を使っても手に入れてしまいうらしい。

そんな女が本田に…！

まああの鈍感な本田が気づくわけないよな。

と考え、いつも通りに授業を終え、吾郎と帰るために下駄箱に向かうと…

そこには吾郎と昼休みに話していた上條桃子がいた！！

第2話：上条桃子の登場（前書き）

更新するのが遅くなってごめんなさい？

でもこれからも頑張って書いていこうと思うので応援よろしく願
いします（＊´Д´＊）

第2話：上条桃子の登場

吾郎は清水に気づくと笑顔で声を掛けた。

「よお！！今帰りか？」

清水はギクツとし吾郎の方を恐る恐る見ると案の定、上条桃子が清水の方を睨んでいた…。

「（こっわゝゝ）うゝうん…本田も？今日部活は？」

「今日は休みなんだよ。」

…ってなんで先帰ろうとすんだよ！！またなんか怒ってんのか？」

そそくさと先に帰ろうとした清水を吾郎が引き止めた。

「（上条桃子が怖いんだよ！）別に怒ってないけど…。」
と言いかけると上条桃子が口を開いた…。

「茂野くーん。今日はあたしと帰ろうよー！」

あの人なんか急いでるみたいだしさ。」

ちよっとムツとした清水はいつもと同じように吾郎を冷やかした。

「あらあら。お熱いですね」

私は邪魔みたいだから先に帰らせていただきますから!!」
ふんつと早歩きで歩き出すと

「ちょ、ちよつと待てよ!!清水!!」

「つか、お前誰だよ!さっきからうつとうしい!!」
と腕を組んでいた上條桃子を振り払った。

上條桃子は驚いた様子で

「…え?何言つてんの?最近ずっと話してるじゃん!ショック」
と騒いだ。

「知らねえって言つてんだろ!勝手にしてくんじゃねえよ!!」

普段から吾郎の口調がキツイことを知っている清水は何とも思わなかったが、そんなことを知らない上條桃子はビクツと驚いた様子だった。

「ちよつと本田…もうちよつと優しく言えよ」

さすがに可哀想だと思った清水は口を出した。

すると、返事は吾郎からではなく上條桃子から返ってきて、

「ちよつと…清水…さんだっけ?

なんで茂野くんのこと本田って呼んでるの?この人の名前は茂野吾郎よ?間違えてるんじゃない?」

と、どうやら強く言われたことは気にしていないのか、というより清水が吾郎のことを知らないんじゃないかと思っただけ。それが

嬉しかったのかちょっと笑いながらバカにしたように言ってきた。

その言い方に清水はイラツときたが、それよりもヤバツという気持ちの方が勝っていた。

——昼休みの真紀子の話が頭をよぎる——

「えーっと…

「別に間違えてるわけじゃねえよ。昔は本田って名前だったんだよ。まあこの学校でガキのころから一緒にいるのは今じゃ清水ぐらいだからなあ…他の奴らは茂野って呼んでるからおかしく思ってもムリないか。」

清水がためらっていると吾郎が答えてくれた。

上條桃子はその答えにムツとしたらしく、顔をしかめながらこんなことを聞いてきた。

「嫌じゃないの？茂野くんはずっと昔のまま本田って呼ばれてて…普通は名前がかわったらその名前で呼んでほしくない？」

「は？んなこと思ったこともないね。別によくな？」

その言葉を聞くと上條桃子は意味ありげに清水の方を睨んだ…。

第3話・波乱の幕開け！？（前書き）

随分と遅くなってしまいました…（・・・）

よかったです読んで下さい？

第3話：波乱の幕開け！？

—— 次の日

「おはよー」

清水が教室に入ると、真紀子が凄い勢いで清水の方に駆け寄り焦ったように話しかけてきた。

「ちょっとあんた何やったの！？」

「えっ？ど、どうしたの！？」

「どうしたの？じゃないわよ！！」

さつき上条桃子がウチのクラスに来てあんたのこと聞きに来たのよ……！！」

「ええ！？まじで？」

（うわゝ多分昨日のことだろうな……；）

清水はイヤな予感がした。

しかし、何も起きないまま5時間をむかえた。

5 時間目・体育（3 クラス合同）

しかも3 クラスというのは…

清水・上條・吾郎のクラスだった。

だが清水は朝の出来事はすっかり忘れていて、普通にグラウンドに向かった。

すると、後ろから声が聞こえた。

「おい！！薫ちゃん！！」

振り向くとそこには野球部集団がいた。

「なーんだ藤井たちかよ。そーいえば今日体育一緒なん…。ほ、本田！！」

そう、清水はやつと重要なことに気がついたのだ。

野球部集団ということは当然吾郎もいる、ということだ。

吾郎を見てハッと清水は上條桃子のことを思い出し、周りを見ると上條桃子がちょうど見えた。

「ご、ごめん！あたしちょっと先生に呼ばれてるから先行くわ！！」

ヤバいと思った清水は話の途中だが、ウソをついて吾郎から離れた。

急に走って行ってしまった清水に男子たちは頭に？マークを浮かべた。

しかし、吾郎は

「……なんなんだよ。あいつ。人の顔みて逃げ出して……」
と呟いた。

誰も気がつかなかったが…。

第4話：チーム分け（前書き）

遅くなってスイマセン？

よかったですら見て下さい？

感想などくれると嬉しいです！！

第4話：チーム分け

「じゃあ今日は3クラスで野球をやりたいと思います。」

先生が言った言葉なみんなブーイングをした。

「1組には野球部の男子がいるから不公平だと思いまーす！」

「だいたい3クラスでとか無理じゃない！？
人数多すぎでしょ！」

すると、ある生徒が

「じゃあソフトと野球で半分に分かれて、野球部を均等にチームに
配分すればよくない！？」
とボソツと言った。

「あつそれ賛成。」

「さすが桃子！」

「3クラスをランダムにしたら茂野くんと一緒になれるもんね。」

”茂野くん”という言葉が清水は聞き逃さなかった。
そう…。

発言したのは上條桃子。

そして、ソフトと野球に分けよう、というのは桃子が吾郎と同じチームになるための作戦だった。

「（どこまでずる賢いんだろう、この人。

あれ？でもしたら私にも本田と同じチームになるチャンスはあるってことだよね！！）」

と清水は一人で考えていると…

「はい。じゃあ今日はクラスでじゃなくて野球をやりたい人とソフトボールをやりたい人に分かれてやりましょう！」

「茂野くんは当然野球だよね。？」

と桃子は吾郎に近寄っていく。

「当たり前だろ。ソフトだったら俺は投げらんねーもん。」

吾郎のその発言にすかさず藤井がツツコむ

「いやいや、野球だとしても素人相手に本気で投げらんねーだろうが！だからどっちにしようが関係ないって。みんなどっちでもいいっていつてるからジャンケンで分かれるぞ！！」

「ああ、そうか…ならどっちでもいいや

さっさと決めて始めようぜ
じゃあいくぞー

最初はグージャンケン
ポンー!!」

……結果

野球：田代・藤井・宮崎

ソフト：吾郎・丸山

「ソフトか…

よし丸山！バンバンホームラン打つぞー!!」

「う、うん…」

…一方女子

女子は2人でジャンケンして負けた人は野球、勝った人はソフト、
というルールになった。

「勝たなきゃ本田と一緒にソフトできないじゃん…
ここは何が何でも勝たなきゃ!!」

すると、真紀子が

「薫はソフトがいいんでしょう？私はどっちでもいいからあんたソフト
いきなよ」

と言ってくれた。

「えーでも私は真紀子と一緒にいいよ」

仲良くない子とジャンケンして2人共勝てばいいじゃん！」

と清水が提案をしたその時…

「清水さん！！ジャンケンしょ」

「えっ？上條さん？なんで私と？」

「だって仲良い子とジャンケンしたら離れるの確定じゃん？だからどうしようかなあ…って思ってたら同じようなことで清水さんたちも困ってたからさ…！」

「そうだったんだ！じゃあ…ジャンケンポン」

勝者…清水

敗者…上条

負けた桃子は

「うつ…ウソ！？超最悪…」

有り得ない！！」

と言つて去つて行つた。

「…？なんで最悪なの？」

あつやっぱり本田と離れたからかな…？」

未だに桃子がジャンケンをやろうと言つた意図がわかっていなかった清水。

そんな清水を見かねた真紀子が説明してあげた。

「薫…あんたやつぱり鈍感だわ。あのねえ…上条さんがわざわざ薫にジャンケンをやろうつて言ってきた理由はただ友達と離れるのがいやだからじゃなくて、あんたを茂野くんと同じソフトにしたくな

かったからよ!!」

「ええ!?!なにそれ!?!」

てか、あたし勝っちゃったし…」

「まあ、それはあつちは予想外だったみたいね -
相当悔しがってたから。」

自分が勝つていう自信があつたんじゃない?」真紀子はケラケラ
と笑っていた。

一方清水は

「どこからそんな自信が生まれてくるんだか…」と呆れるしかな
かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8452h/>

幼なじみ

2010年10月11日21時49分発行